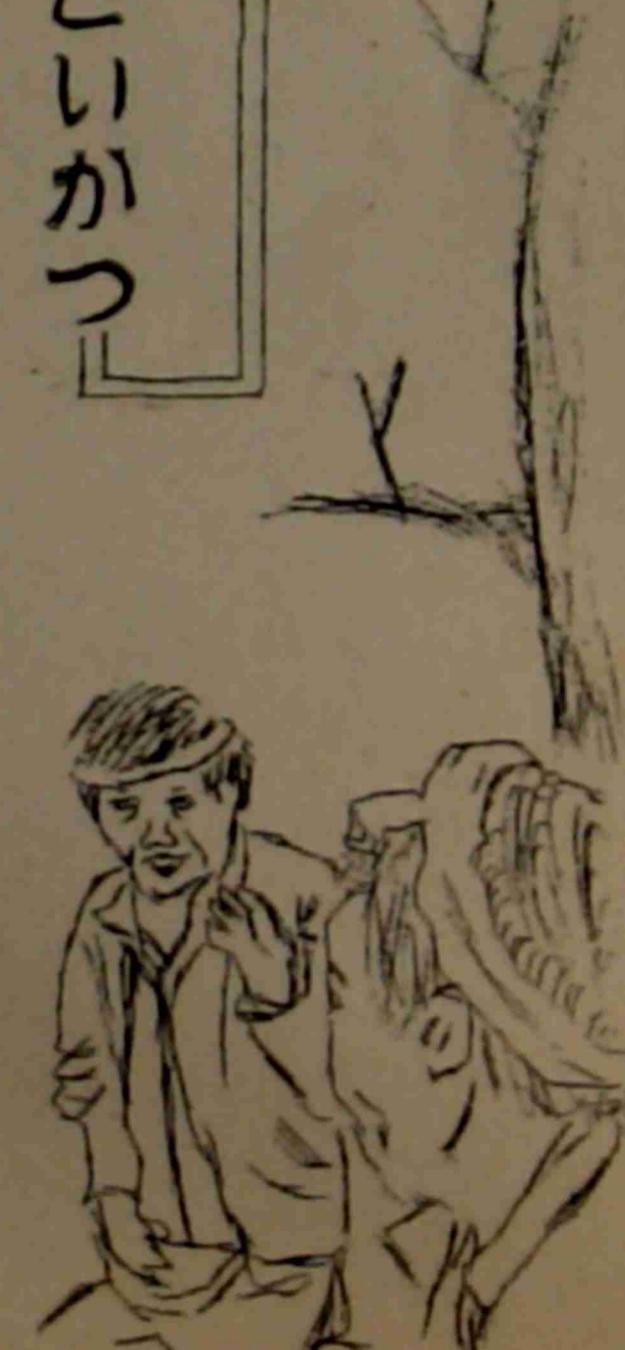


三
て
ん



「あおぞらがと
われらがせいかつ」

アシは歩くのを西北にたら5ヤカン

「このことは先輩がおっしゃられた通り。」と、さすがに、アーレはアーレの本音を口で

ソブルなどをやりに、あるいは飲み友達を求めて歩く。

セントラルからじゆ区のあか東側を通って一路南下、仙源寺公園、西成市民館を経て萩之茶屋商店街に出、左右に流れのか、あるいはそのまま直進し、二角公園周辺の茶屋町かノミ屋に行くコースだろう。

歩いた末はどうなるか、ということ、パン

確かに、金では立ち食いのオニギリを六
人モ、一食アガハダして居る。

に安川屋の前、花火祭屋商店街との交差点一
セニ角ハム園、じ地区の一角などを中心についた
もくろと見がせる。

は生活のかなりの部分が露天、青空の下で営まれて居ることは確なようだ。

レーベル一露面

モ。道端にて、アサヒや、カミナリなど、此の種のものもある。

「おれの古風なヤーは、遅。お先づけを専門
とする老舗も西よりだ。天下足利に年が
ぬ間に幾二た日佛たちを絶えずひりして
二る。道に生でたまつ。おまへ食ひ波り、

の主たちは太公望のようになだらかと坐つて雪が
来るのを待つて居る。商店の口物の中には、
思わぬおじいものがある。パークーの万年筆や
オメガの腕時計も時にはまさか「ん」でいる。

いんちき品ではない。それらはすぐて盗品。
であった。しかし値段はいんちき品と余り変
らない。商店の親爺もいんちきの方が良いと
思つて居る。警察に破滅の嫌疑を掛けられて
は馬鹿らしくからである。だがそんな品は、
ジャの上に並べるとすぐ売れる。

買うのは背広を着た男たちである。
時々彼らは盗んだスクーターなどをこの街
に持ち込む。そしてそれらの品を扱う店は決
つてしまふ。しかしトタン屋根の汚れた古物屋
の通りでは、盗品を扱わない店の方が多かつ
た。

扱う店は少つて居る。ただ盗品が大きい場
合は、店には出されない。それが専門の仲間があ
つて、少し離れたを通りで取り引きをする。
スクーターなんかができるので前のように、
二軒は今の釜の話ではなく、昭和三十年

頃の話。黒岩重吉さんの小説も書いた庄に日
の昌政で萩えび屋駅用の橋でがなされてい
るが、それの一剖分である。スクーターを自
転車かカラーテレビに置きかえれば、三十年
前の話とは思えない。

今も萩えび屋駅を左に出でて高架に沿つて南
へ歩けば、いや歩くまでもなく駅を左にひむ
るだけで商店のあた屋、時計屋などが営業中
である。ことずれかるし、その商店の角に続
いてあ案の下に店舗を構えている古物屋があ
り、二三ヶモノの店々さなかめながら
歩いて左に曲ると古物商がどうりと並んで通り
に立る。

日本国は異常でなんとか外貨を減らさなければ、
と三十年前にはあざられないような傾
向にありにおいては釜は三十年前とあまりかわ
らず、と三十年前にはあざられないような傾
向にありながら、古物屋の商業をみ
つけていたりようだが、古物屋の商業をみ
る限りにおいては釜は三十年前とあまりかわ
らず、と三十年前にはあざられないような傾
向にありながら、古物屋の商業をみれば、釜の生活は敗
戦直後の状態に近づき、変わつて居るよう
に見える。

一

敗戦直後の日本の大都市では闇市が庶人に

なり、多くの人が露店で、握り飯、さつま
いも、肉入りうどん、モルモン焼、椎炊、あ
でん、通、饅頭といった食で物や鍋、釜、笊の
ん、靴、地下足袋、戦闘帽、鞋裏、白衣、ノ
コ、鉄道、電気コンロ、ラジオなどありとあ
らゆるもののが売られていた。

今、釜で商店が博えて居るが、その多くは
闇市の宿泊である。

絹袋からカッターンシャツや作業服、あるいは
コケシなどの人形等、機器用小型ラジオ、
鞄など五六十点あるリヨー一点だけを新聞紙の
上に並べ、今晩のドヤ付になればいいんや、
とか、これで一杯飲めるなんて言いながら売
つて居るのは、萩えび屋商店街などでよく見
かける。

これは一房シンギだが、中には、西成ホル
銭の前にゴザを効き、何でも買いますの札を
出して居た人のように、少しの元手で仕入れ
それをその場で売りさばき、最初は雑誌二冊
とおれにく三枚だったものが、一週間もする

うちにゴザ一枚に〇〇円を並べて売る商人に
なる人もある。

大寺司食堂の前、ホルモン屋とその南側の
笠翁会堂の店先をを利用して店をだして居る
人もその口で、二年ぐらいい前は週刊マンガ五
六冊とお菓子、二枚を並べていろだけだった
が、今は自転車に杯を差すやう日用品や、そぞ
せてやつてくる。一人、数々品を出して
りくから高を軽んじのか、といふとどうでも
なく、すぐ隣のつるぎやに入り通りで、よく
取ばれては売り物の上にひっくりかぶつ
て寝て居る。

敗戦後の中市方、持つて居る物を売つて
金う、を宿店するとどうなるか。フリチン、
素裸になる。

萩えび屋商店街と銀座通りの交差点に近く、
間たまになつて居るキリン屋と「日用品、
タバコの店があり、その前がシンギ商店の半
島になつて居るが、二二で商店うちまた銀座し
たらしく處わける人を見かけたことがある。
フリチンでしばらくラロウロして居たが、

なんせ西成署から見えるところ、すぐたゞまが足で走りていってしまった。

シノギのために持ち物から着ていた物までを売ったとすれば、一人の人、売った金と西成署の只領でしばらくシンボたことだけは確か。しかし、よく考えて見れば、素裸だったの人は、売り上げた金をどこに入れていたのだろうか、手には何ももつてしなかつようだが。

身ぐるみ売つねつた人々を見かけて二三日して、また同じ様な人を見た。露店は、これもシノギ露店の多い新大阪屋商店街と西成市民館のある通りとの交差点。あの辺の房のシャンターに出店したことわりの札が貼ってある所は、朝早くから六時近くまで、露店が店を出してしている。

その人は、カツターシャツを着いて二角公園の方へ歩いて行ったところを見ると、自ぐそのじきによるとされるものは、作業服、迷彩下足袋、靴、大工道具などの道具類、一人位位に必要な日用品などだそうで、日曜日には一万円以上の売り上げがあつたといつ。

原伝は、今庄用のトヤ代一四四〇円、不用品で捨てられていろものを拾いに来て交通費ぐらい。

ため現在は休業中、ひ組出張クイスク六九〇円、N造船六〇〇円などのは事でメン看くつていう。

そのためによるとされるものは、作業服、迷彩下足袋、靴、大工道具などの道具類、一人位位に必要な日用品などだそうで、日曜日には一万円以上の売り上げがあつたといつ。

そのためには、当人を計算したことはないといつことではつきりしないが、あえて計算しなかつたのはそんどうからつて用品で捨てられていろものを拾いに来て交通費ぐらい。

石垣の赤値は、ズボンが百円か一百円、作業着が二百円か三百円程度。食料とかナゲなどは、適当に一〇円、五〇円などの値段が付けていたが、中には空からりこれ、なんぼりと言ふめて「ウーン、百円」といつた段分にいさ高たりばつたりに値を付けて売っていたものもある。

と。

西成署へ引っぱられた人などとはまりとりうよりも無いといつた方が正確なぐらいで、シンボの付け根が打ち身の跡のようにな黒いだけ、シャツを抱えていた人は、女性の長髪のよう赤裸けたなく細いのがぱらにあるだけ、よく見ないことを付かない程度。

神にならることと嘘の詳しいことは何か關係があるのか知らん。この話、本題とあまり関係のないことだけは確か。

シンボガ露店入門

話を元に戻して、黒髪に左腕にタトゥーのアンコから足を洗い、自分で捨てに行くてメンを食える露店高を目先としているじきの話。

じきは今年の一・三・四月の三ヶ月間、金生板のまわりで早じまいした店の軒先を借りて露店高を営んでいたが、三月公園からノニ屋が退避して流れ込んでからは、人は集まるが本業にはならぬし、といつ状態になつた

露店高をうまくやっていく「ツ」は、と聞くと、商品知識が堪え、旦がよくなること、一一塙位を確保すること、それにやはり捨てるところの専門ではあるになりにくいで、ホにいつて買、てくれることも必要だつて、といつことだつた。

じきは、西び露店高を始めすべく、仕入の金などを貯めるために仕事に精を出しているが、最近は飯場が多く、まとめて働くことその反動で金へ寄るとバーツト飲んで、ドヤンブルして、というぐあいで、なかなか戻りようになり難いようだ。福張つて。

露店高をやること。なんせ素人がやることだから、物を売るということに何やらはずかしさを嘗え、新聞紙をひろげ時計やシャツを立てたはいいが、当の物本トはされから少し紛れただと、立つて、体はあつたを向いて座たけど、品物をたらた、といつことになりかちだが、シカドは高く見ることは出来ません。ヤケリ品物の前に空カリニ映緑の一つでモヒかなけ

ればなりません。

仕事をへ行くにしてモ、こやは一種の元氣、高先で、一いちじう下キばかりに出でていては口づきことにはならん。

セソターから仕事へ行くのも、周囲の路上キ配で仕事へ行くも、商店の高いと大した遣いはない。あるものがほんの少し違うだけだ。

宛つて 食つて・チヨン

労働力を売るか、あるいは品物を売らかして金を手に入れたら、次は食である黒だ。

血を売つてノラーメン食つてノ焼酒飲ん

でノ千七百円、こやはKさん短物だ
か併句だかよくわから左い作品だが、何やら誠にごそつともといふ感じがする。

あはら、人ひ自分で作つて売りにきてるんやう、出来事やつてる人やう、ワシたは刑るんや、ときめめてふく出で見せたオバチャン達がやつていろとかえ食堂前の早鳥・野球の店、その旅館ハウスの旅アヤつて山小屋、お所

にあるマルモン屋、そして、露天からターターの穴煎餅二枚に入りながら、いまだに屋台店の露天風呂を厚く食堂街。金うぼうも結構露天天でまにあつ。釜ヶ崎日雇分組のやつている炊きたしも露天だ。

マメな人達は自炊をする。

金を貰るのぞ露天、金うのち、日用品を貰うのモ、時としては宿るのも露天。そして、死を幽えうのモ……。

ああやうかと われらサセいかつ ただただ、ヘソの縁を切つたが屋内といふのが临やまゆる。

＊＊＊

“ごこん”は最初“露天”であつたが、どう少しくちもたせようと“ごこん”とした。しかし、フロントを抜けただけで、更直しながらにはとてもじや方いがなリえなし。露天でおにぎりやをやつた経験から。えげ、雨の日にこそ傘りかつて店を出すことに賣氣のようなものを感じていた。と同時にドリキれなさも……。